園 長 だ よ り

NO102

2024. 7. 5

梅雨に入りましたが夏を感じる日々が続いています。この蒸し暑さとに身体が早くも悲鳴をあげている方もいることと思います。適時、休息をとり身体の健康を維持してください。

興味があることを追求する

梅雨で思い出すことがあります。小学生の頃の話になります。　夏休みの自由研究で梅雨のことについて調べた記憶があります。　当時、私は梅雨＝うめあめと呼んで仲間たちにからかわれたことがあり、なにくそーと夏場の時季外れに「梅雨の研究」をしたのです。

なんとなくの記憶ですが「雨と曇りの日が増えて晴れの日が少なくなる」とか「雨や曇りの日が多くあらわれる期間」というニュアンスの言葉をつかい梅雨を解説していたと思います。　・雨がたくさん降る理由・梅雨の期間は？・雨が降ると喜ぶ人がいるの？・雨はどこにいくのかな？ など調べたものです。

昨今の本屋さんには夏休みの自由研究の本がずらりと並んでいます。私の幼少期は自分で知りたいなと興味がある事、作ってみたいなと思う物をそれぞれが考え取り組んでいました。　夏休みが終わった体育館には研究がずらりと並んで発表され、仲間同士で研究したものを互いに認め合っていた。研究は遊びに流用し生活に反映していました。

当時の大人は子どものすることに寛大であり好きなことを十分取り組ませてくれた。少数だが教育ママと言われる類の家庭は躍起になってすばらしい研究の成果を子もどもに求めていました。

興味を持ったこと、不思議だなと思うことは自ら調べ取り組んでみることで、その対象を理解していくことが十分できた時代であった。現在のように何でもネットで検索したら教えてくれる時代ではありません。調べる方法を考えることから始めていました。本屋さんへ行き、図書館へいき、傘屋さん（靴や下駄）扱う店などを訪れた、雨はどこに流れるだろうと船橋市内の海老川を河口までたどって行ったりもしました。

私のような子どもが多くいた。カブトムシの研究をする子はすでに夏前から養豚所にいき肥しの中を探り、大きな幼虫をバケツ一杯にとっていた、私も同行した自転車で２時間かけ行ったことを思い出す。

小学校時代は大きな街道（国道２９６号）は歩道が狭い所があり自転車を乗っていけないという決まりがあった。約束よりも幼虫確保である。押して歩いていれば現地へはつかない、でも先生に見られたら、密告する児童がいたら、こっぴどく叱られることになる。そんなリスクを承知で往復 4 時間の幼虫とりも参加した。「なんでも、できた時代であった。」

頭はそう良くはないけど生きていく力はあった。

そんな学童期を過ごしてみんなたくましく成長していた。

先ほどの「梅雨の研究」も「カブトムシの幼虫さがし」も親には言わない、行くことさえも伝えない。　知られていたかもしれないが、親は無頓着である。　両親は共稼ぎであった消して裕福な暮らしではない。俗にいう「かぎっ子」であった。

※両親が働いている家庭はみんな家の鍵を首からぶら下げていた。

私は厳密に言えば、かぎっ子ではない裏戸は全部空いている。誰でも勝手に入れる状態であった。現在では考えられない。泥棒に入られても持っていかれる物がなかったからでしょうか、それとも向こう三軒両隣というように近隣は仲良しであったので自然と防犯対策はできていた時代だったのでしょう。

便利がゆえに失ったもの

ここまでの話、ぴんと来る方は昭和時代を謳歌した方である。大半の方は物質的には恵まれ、願えばそれなりになんでも手に入る時代、便利な生活の中で過ごしきたように思います。　今はもっと便利な世の中になっている。日本だけでなく海外の情報も瞬く間に知ることができる。遠くの人が近くに感じられる仕組みもどんどん進む、情報もネットワークで結ばれる、自分の情報は知るべきところでは把握され、管理されている。セキュリティーは強化される。

自分の位置情報さえも知られてしまう。便利になると管理と統制がわからないうちに強化されている。こんな時代になってしまった。

「昔を懐かしむ」と私世代は時より使う言葉である。不便だけど知恵を絞って考える。おもちゃなんて金持ちの贅沢品、みんなで考えた、作った、公園に行けば（ドラえもんに出てくる土管がある空き地）子ども達の世界がある、ルールも子ども達で作り遊んでいる。学童保育などというものが殆どない時代、日没まで遊んでいた、幼少から児童（時々中学生）がみんなで遊んでいた。　子ども社会で小さい子も大きい子もそれぞれの意見を尊重され、大事にされていた。

今、そんな場所はごくごく限られている、無いと言っても過言ではない。

こんな背景があり保育園の役割は重要視されています。　子ども達のやりたいこと、やってみたいことに取り組んでもらい、尚且つ自分の思いや考えを伝えられる。一緒に過ごす仲間と協同し活動する。感情のぶつけ合いや思考のやり取りもある。活きた生活体験の中で人としてごく自然に体験できていたひと昔前とは異なり、意識して保育の中で体験できる環境をつくることを心がけていきたい

（おおぞら保育園　園長　廣部信隆）